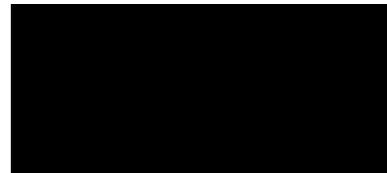
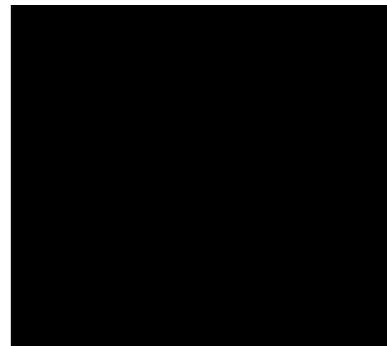


ぱらで
いん



Wig



「おはーっす姉さん」

店の中にしまっていた看板を抱えた店員が、奥に続く住居から顔を出した人影に声をかける。

色素が薄めで癖っ毛のラフなボブが寝癖であちこちに跳ね、まだ残る眠気からか半眼のつり目はややもすれば威圧しているように見えるが、返事をする声は柔らかい。

「相変わらず早いなあ、ペパロニ。風呂入ってくる」

「アンチヨビ姉さんちに居候の身っすからね。その間に朝飯作っておきますよ」

外跳ねのミドルヘアに編みこみのワンピーストを入れ、自分で勝手に決めたメイド服を模したウェイトレスの制服に身を包んだペパロニは喜色满面返事をし、看板を抱えたまま脚と上体でドアを支えて外へ出て行く。

「脚は使うな、スカートの中見えるぞ」

「大丈夫っすよ、野郎の下着見て喜ぶ奴なんていませんって」

「お前なあ。それに店のイメージもあるだろうが」

そう言われると、一拍遅れておおと声を上げ、上体だけでドアをずり開け看板を外へ持っていく。厨房からは、両親がモーニングの仕込みをしている音が聞こえる。

「かわいいのに、自覚ないんだよな」

同居人の背中にこぼしつつ、アンチヨビは浴室へ入って寝汗を吸ったシャツとシヨートパンツを脱衣籠に放り込むと、下着姿が姿見に映る。

服によって演出された曲線が減り、男性の特徴を抑え難くなってきた肉体が露わになる。

溜息。

千年以上の昔、人類が地球という揺り籠以外を知らなかった時代はともかく、故郷から巣立った世代移民の時代になると、戦車道は女性の競技者が大半を占めるものになった。

彼、安齋千代美はそんな時代に戦車道を志し、そして才能を開花させた。中学生時代にチームリーダーを務め、新名古屋行政区大会で仲間を勝利へ導いた。

その頃から、彼は女性を装っていた。

チームの結束を高めるためにはみんなと同じがいい。

それに、彼は自信家である。

自分は絶対にかわいいのだ。

本物の女性と同じように、あるいはそれ以上に。

そして名古屋の安齋は、特待生としてアンツイオへ招聘された。

今同居している騒々しい下宿人のペパロ
ニも、そこで出逢った親友だ。

彼は男子生徒でありながらなんだか面白
そうだという理由だけで戦車道を志し、姉
さんがそうしてるなら合わせるっすと女装
して精神面からチームを支えてくれた。

そして、もうひとり。

洗面台に置いた携帯端末のスタンバイス
クリーンでは、もうひとりの莫逆の友が微
笑んでいた。

カルパッチョ。

彼女はアンチョビの翌年に戦車道強化の
ため招聘された生徒で、副隊長として試合
の指揮を執る一方、ペパロニが頭を沸騰さ
せている横で事務仕事も手伝ってくれた。

常に苛烈な自信家として己を鎧ってきた
彼にとつて、彼女の穏やかな心性は異質な
ものだった。

それは不快なものではなく、足りない部分を満たす何か。

戦車道に邁進してきた彼にとって、そこそ初恋といえるものだったのかもしれない。

だが、彼は同時に戦場で髪を靡かせ、姉さんと慕われる少女でもある。

それを否定できれば簡単な話ではあるのだが、少女としての自分も否定しがたい彼だった。

そんな己を、彼女は受け入れてくれるのだろうか。

迷い続け、結局答えは出せずにアンツイ才を卒業し、故郷にある新名大に合格して新名古屋へ帰った。

大学でも請われて戦車道サークルへ入部したが、髪は切った。服もボーイッシュなものをあえて選ぶようにした。

その方が、少しは彼女に異性として見てもらえそうだから。

それからも連休や休暇で清水に寄港するアンツィオを訪問しては自分への言い訳のように後輩たちの面倒を見て、そしてようやく一年後の卒業式、カルパッチョにその想いを伝えると、彼女は変わらぬ穏やかな微笑みで頷いた。

「でも、髪の毛の長い統帥も素敵でしたよ。なんで切ったんですか？」

その言葉を受けて張り詰めたものが切れて膝が崩れ、彼女を抱擁するはずだった腕は地面を滑り、逆に彼女から抱擁されることになった。

「無理しないでくださいね」

抱き支えられながら、そう耳元で囁かれた。お見通しだったのかもしれない。そう安齋千代美は考えている。

ともあれ彼の初恋はなんとか成就したものの、彼女の進路は故郷の研究学園都市だった。テラフォーミング技術者を両親に持つ彼女にとって、それは憧れの道だったのである。

想いは通じたが触れ合える機会は減ってしまった。

そしてなぜかペパロニは新名大へ入学し、安齋家の居候となっている。千代美が帰ってくるのと同時期に学園艦での生活に移った弟のこともあり、両親はとても歓迎していた。

もの思いで火照った体に赤面しつつ下着も脱ぎ、既に湯が張られた湯船に身を沈める。ペパロニが入った後の湯はいつもやたら熱いが、一年同居していたらそれも慣れてきていることに彼は気づく。

この惑星、ゴルディロックス・スリーは

地球の三倍強の直径を持つ。軌道上からのテラフォーマ投下から開発が始まって百余年が経つが、まだ表面積の半分にも人の手は触れておらず、学園艦をはじめとした降下船とその補給基地である港がいまもって人類の主な居住域であり、地上の開拓は進んでいない。

後から調べたところによると、大洗の廃校予定も船に搭載されていた構造物を地上へ移設する整備計画の一環だった。脱衣場に置いた携帯端末から流れてくるストリーミング放送からは、第三十七次国土整備計画が国会で承認され、新東京行政区、新大阪行政区、新名古屋行政区を中心にさらなる地上都市の拡充が行なわれることが報じられている。

事実、アンツイオを卒業して実家に戻ってきたときの新名古屋は様変わりしていた。

彼が小さな頃はこの辺りもこの喫茶店も含めた商店街があるくらいの住宅地だったが、今では次々と新しいビルや施設が竣工していく。

風呂場の窓からは、シートに覆われた建設中のビルが見える。近いうちにこのあたりの商店街も見違えるようになるのだろうと、彼は考える。

古くからの常連と工事関係者、さらに料理上手なペパロニが店を手伝ってくれるお陰でわざわざ食べに来る客もついたが、両親からは後を継ぐ必要はないと釘を刺されている。

多分、この風景は変わってしまうのだから。

短くして洗う時間も短くなった髪を流し終え、バスタオルで体を拭きつつ新しい下着を着け、服を着る。飾り気のないブラウ

スにパンツ。レディスではあるが、男性に見えなくもない姿に。

流しっぱなしにしていた携帯端末のスタンバイスクリーンは、カルパッチョからメールの着信を報せている。新東京での用事があるので、そのついでに逢いたいと。

研究学園都市まで行くのは手間だが、新東京なら交通機関も多い。すぐに返信し、ついて来たがるペパロニをあしらうことかもしれないと苦笑する。

ダイニングへ戻ると、オリーブオイルとトマト、そして焼けた玉子の香りに迎えられる。鉄板ナポリタン。高校時代からずっと作ってきたペパロニの得意料理だ。

「今日はちょっと長風呂っすね。もう出てますよ」

「ありがとう」

レモンの輪切りを浮かべた水差しから自

分のコップに注ぎ喉を潤おしてから、暖かな湯気を上げているパスタを口に運ぶ。

「姉さんが食べてるところを見るのは幸せっす」

根拠はないが、ちくりと胸が痛む。

決して成績がいいとはいえなかったこの同居人がわざわざ新名大を受験し、この家に転がり込んできた理由を考えると。それが好意で、しかも無自覚なものであるかもしれないとなおさらに。

安斎千代美のすべてを無条件に肯定してくれている彼を裏切ってしまうのではないかとアンチヨビは考えてしまい、しばし手が止まる。

「どうしたっすか？ 姉さん」

「ああ、そうだそうだ。さっきカルパッチョからメールが来た。逢わないかって」

やはり、隠すのは辛い。

「よかったっすねえ。でも波大遠くないっすか？」

「新東京に出るから、そのときって話だ」

「それなら行くといいっすよ！　もう何ヶ月ぶりじゃないっすか！」

パスタを口に運びながら屈託のない笑みで祝福する。

「いいのか？」

訊ねる。アンチヨビは卑怯でありたくない。

ペパロニはきょとんとした顔をし、数秒の間を置いて何か考える様子を見せる。

「あっ。お店の手伝いと講義は両立できるから大丈夫っすよ」

思わず口を開き、そうじゃなくてだな。と言いたくなるが、彼は言えなかった。

やっぱり卑怯なのかもしれない。そんなことを胸にわだかまらせたまま朝食を終え

る。

「今日は二限からなんで、片付けるっす」
そう言うやさっさと食器を引いて、流し
で洗い物を始める居候。

アンチヨビも一旦部屋へ戻り、登校の準備をして玄関へ通じるダイニングを通る。

ペパロニは洗い終わった食器を拭いている。
「あたしはアンチヨビ姉さんと一緒にいれるだけで、なんかいい感じっすから。そう
気にしなくていいっすよ」

「お前」

それ以上は言えなかった。彼ははずれ裏切ってしまうことを承知の上で慕ってこれている。

「笑ってくださいよ、姉さん。あたしもカルパッチョも、笑って突っ走ってる姉さんが一番好きなんすから」

「無理を言うなよな」

声の水っぽい。多分泣いているのだとアンチョビは感じる。

「だけど無理なんすかねえ」

ダイニングから逃げるように足を踏み出しかけたアンチョビの動きが止まる。

「姉さんがいて、カルパッチョがいて、あたしがいて」

振り返ったペパロニの表情はあくまでも笑いながら、少しの哀しみを湛えている。

「アンツィオの頃みたいに、みんな仲良くするってのは」

最後に拭かれていたグラスが食器棚に置かれ、静寂が訪れる。

「どうなんだろうな」

肺から空気を吐き出すように、アンチョビは返す。

「ゆるゆるっとやってければいいんすけどねえ。でも姉さんの恋を邪魔する気はな

いっすよ」

「わかってる」

「じゃ、そろそろ出ないと一限遅れちゃいますよ」

ペパロニに背中を押されながら、玄関へと導かれる。靴を履いているアンチヨビの横で、彼は悪戯っぽい笑みを浮かべて囁いた。

「どうっすか、今度逢うとき本当にウィッグつけるのは」

〈了〉